

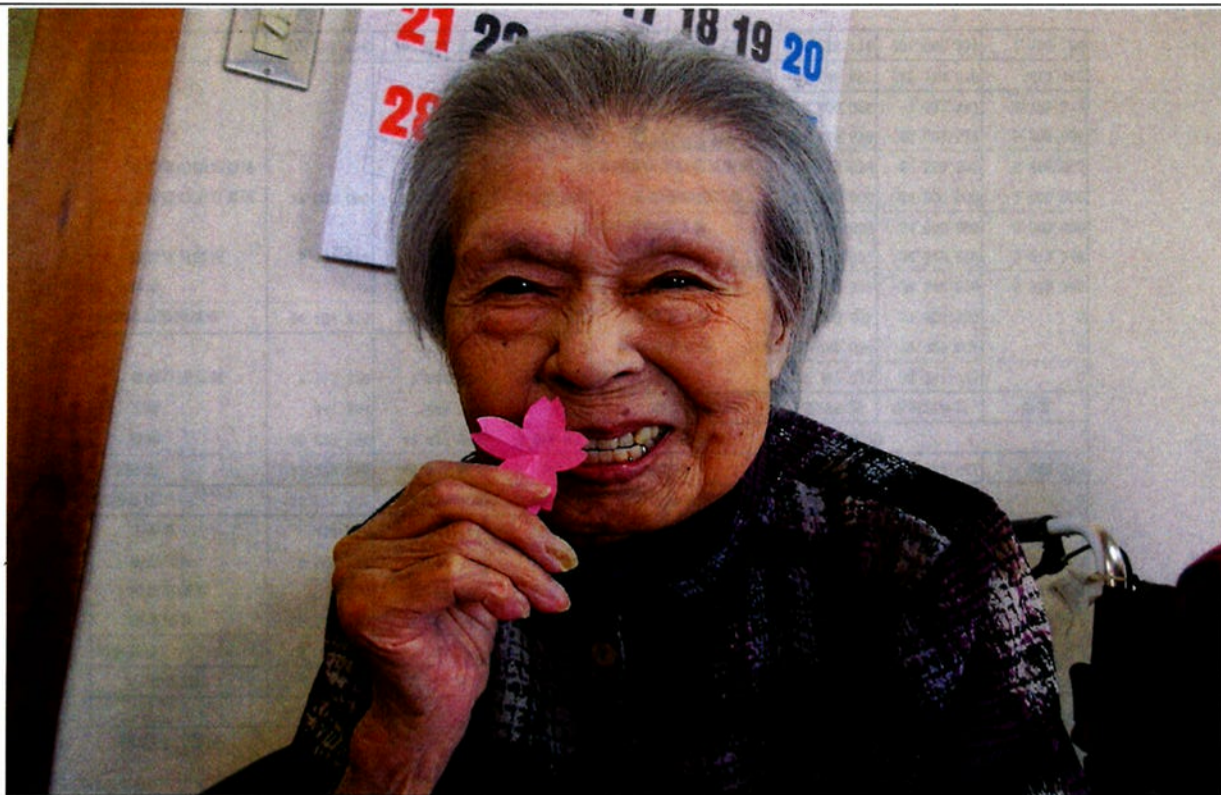
発行所 養護老人ホーム
延命園
長崎市寺町3-1
(095)822-8563
発行責任者 園長 堤 祐敬
題字 池田可宵先生



敬老会のワンシーンより

平成から令和へ

受け継がれていく大切な思い



大正生まれのHさん ※写真と内容は関係ありません。

大正十三年からお年寄りの生活に寄り添い続けている延命園も「令和」という新しい時代を迎えることができました。延命園の利用者の皆さんも大正、昭和、平成と移行行く時代を過ごしてきました。今回は、昭和生まれのYさんに、お話をお聞きしました。

そんなYさんが、いつしか自分の思い出を詩（ポエム？）に乗せて話してくれるようになりました。苦労も多かった青春時代の中でもYさんにとって輝かしい思い出になっているシーンばかりです。

Yさんは、幼い頃に母を亡くし、弟や妹の母親代わりとなつて家事を手伝っていた。母はとてもやさしい人だった。Yさんが家の外で「夕焼け小焼けを」口ずさみながら遊んでいると、母が料理を作りながら自分の歌に合わせて口ずさんでいた。うれしくて家の中に駆け込んだのを覚えている。料理上手だった母は、いわしの「すり身」の作り方を教えてくれた。今でもそのことが懐かしく、延命園の食卓にすり身揚げが並ぶのを楽しみにしている。

母が亡くなった後、弟と妹たちが学校へ行っている間、父と二人で家族の健康を願

って観音様へお参りへ行っていた。海沿いを歩き、畑の真ん中を通って山を登って行った。日の丸弁当を作った。父と一緒に参りに行くのが楽しみだった。

『父と観音様へ参る』

急な山を登って行った
たけのこ、つわを入れた
日の丸弁当

やさしいお父さんとの
小さい頃の楽しい思い出』

観音様に参る前日には、「お弁当は何を作ろうか…」心がウキウキしていた。ある時、兄弟四人でイモを囲炉裏で焼いていた時の事。食べようとして囲炉裏の中を探すけど、入れたはずの芋が見当たらず…

『兄弟四人』

囲炉裏で芋を焼く
全部隠していた弟に
皆はだまって
また四個の芋を焼く』

父はその光景に大笑いした。弟の洋服から芋が出てきたが、誰も咎める者はいなかった…

兄弟仲が良かったYさん一家の情景が目には浮かぶようだ。父は優しい人だった。人に「ありがとう」と「すみません」は必ず言うように。物をもらった時は必ず父に教えるように。怒った時には、必ずその理由を話してくれていた。父からの教えや母の手料理は弟や妹に伝えてきた。八十歳を過ぎたYさんの姿にお父さんやお母さんの面影を感じる思いがした。「時代は移り変わっても変わらぬに伝えていかなくてはならない大切なこと」があるのだと思えました。

こうして命と心のバトンは今に受け継がれてゆくのでしよう。

昭和という戦争・高度成長の時代を乗り越え、平成という平和な時代を生き抜き、令和という新しい時代を迎えました。

新しい時代を迎えてもYさんの生きてきた時代を、思いを、繋いでいく使命が私たちにはあると思います。

